KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

英語の慣用的間接依頼表現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): ポライトネス, 待遇表現, 待遇表現, 日英比較, 法助動詞 キーワード (En): 作成者: 堀, 素子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006244

関西外国語大学 研究論集 第84号（2006年9月）
Journal of Inquiry and Research, No.84 (September 2006)

英語の慣用的間接依頼表現[1)]

堀　　素　子

要　旨

英語の法助動詞（modals）は日本では文法事項として指導されているが、語用論的機能については英会話の中で触れられる程度で終わることが多く、真にそれらがどのような使われ方をしているかにまでは及んでいないと思われる。

本論文ではブラウンとレビンソンのポライトネス理論に基づき、ネガティブ・ポライトネスの代表とされる「慣用的間接表現」に使われる法助動詞をコーパスのデータによって分析する。特に「依頼表現」に焦点を当てて、それらの表現がもつ意味と機能を日本語の敬語と比較しながら議論する。

英語母語話者は「依頼」を「フェイス侵害行為」（FTA）と捉えているために、相手の「領土への侵害」を緩和することを第一の目標として、modals を含む慣用的間接表現を使用している。日本語の敬語にも類似の表現があるが、それは対話者間の上下関係を明示するためで、行為自体を問題としない点で、英語の敬意表現とは鋭く対立する。

キーワード：ポライトネス、待遇表現、敬語、日英比較、法助動詞

1．研究の目的

本論文では、ブラウンとレビンソンのポライトネス理論のうち、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーで第1に挙げられている「慣用的に間接的であれ」（Be conventionally indirect）（Brown and Levinson, 1987: 132）とはどのようなものか、なぜ2つの相反するストラテジー、「直接的であれ」（Be direct）と「間接的であれ」（Be indirect）が「衝突」（clash）してそれを構成するのか、英語における代表的な慣用的間接表現とはどのようなものか、そしてそれらは英語母語話者にはどのように‘polite’と認識されているかについて、コーパスのデータを基に分析する。日本人英語学習者のために日本語の敬語との関係も随時触れる。

2．ネガティブ・ポライトネスの理論的背景

2．1　ネガティブ・ポライトネス（Negative politeness）の意味

まずブラウンとレビンソンがネガティブ・ポライトネスをどのように定義しているかを見てみよう（1987：129-211）。彼らは、理性ある社会人はみなポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスという2つのフェイスを持ち、それを尊重されたいという欲求を持っているところから出発している。前者に関わるのがポジティブ・ポライトネスで、相手を積極的に認め相手と同調し協力する手段として親密さを強調するのに対して、後者に関わるのがネガティブ・ポライトネスである。これは相手に何らかの負担をかけざるをえないとき典型的に発動されるもので、一般的に丁寧な振る舞い・言葉遣いとされるものは大部分この範疇に入る。人は本来行動の自由を持っているので誰からもそれを脅かされないはずであるが、やむを得ず相手の行動を制御するような行為、これを「フェイス侵害行為」（Face Threatening Acts, FTA）と呼ぶが、これを行うときは何らかの緩和処置をとることが期待される。その場合人はどのような行動をとるのか、特にそれを言語で表明する場合にはどのような表現を用いるのかを、理論化しストラテジーとして示したのが彼らのネガティブ・ポライトネス理論である。

FTA を緩和するためにどのような行為をするのが妥当であるかを知るために、ブラウンとレビンソンはフェイス侵害行為の重み Wx を計算する方程式を提示した（Brown and Levinson, 1987: 76）。すなわち、ある文化におけるある行為を x とし、話者 S と聞き手 H の距離を D、両者の力の関係を P、行為 x が当該の文化において聞き手にかける相対的な負荷の度合いを Rx として、$Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$ という計算式を立てた。これによれば、D, P, Rx のいずれが大きくても Wx は大きくなるが、「特定の文化における行為の相対的な負荷」という Rx を加えたことで文化による差異も評価に加わって、ある程度の普遍性を得ている。しかしながらこの理論の根底には英語圏社会の対人関係が基本にあることは彼らも認めている。

2．2　'Be conventionally indirect'（慣用的間接表現を使え）

ブラウンとレビンソンは、なぜ 'Be conventionally indirect'（慣用的間接表現を使え）が FTA の緩和策になるのかについて次のように述べている（Brown and Levinson, 1987: 132）。

すなわち、相手に何かを依頼する際にはその意図を明示的（on record）に伝えなくてはならないが、一方相手へのフェイス侵害度を低くするためには言語表現は相手に逃げ道（out）を与える非明示的（off record）なものでなくてはならない。前者の目的のためには「直接的であれ」（Be direct）というストラテジーをとることになり、後者の目的のためには「間接的であれ」（Be indirect）というストラテジーをとることになる。

依頼行動に見られる類似の葛藤はどの文化・社会でも起こりうるが、それがどのような言語

行動となって表出するかはそれぞれ異なる。英語圏社会では互いのフェイスを維持しながら目的の行為を遂行するために直接的な命令を表さない多くの文形式が「慣用的間接依頼表現」として社会に定着した。このような表現は、仮に内容が相手への命令であっても、少なくともFTAを避けたいという話者の配慮は伝達することができるので 'polite' な表現とされている。

このようなポライトネスにかかわる表現は、本来実際の使用場面を観察して論じるものであるが、それができない場合は資料などから実態に迫るしか方法はない。そのため本論文ではコーパスからのデータを基にして、英語母語話者の意見を取り入れながら、英語の慣用的間接依頼表現のもつ待遇表現的な意味に迫りたいと思う。

3．コーパスによるデータの分析

ブラウンとレビンソンは等位者間で依頼をする場合の慣用的間接表現の構造を次のようにまとめている（1987：135)。本論文ではでこれを手がかりに資料を探ることにする。

(a) question +/− subjunctive +/− possibility operator +/− *please*
(b) assertion + negation +/− subjunctive +/− possibility operator +/− tag +/− *please*

資料はインターネットで公開されているコーパスから代表的依頼表現の出現数と例文を見ることにした。なお今回はもっとも典型的なものとして (a) の疑問文のみを見ることとした。使用するコーパスは、100 million words を擁する British National Corpus (BNC) と、シャーロック・ホームズのテキストを含む Web Concordancer である。ただし BNC は無料でネット検索できる50例に限定した。[2)]

3．1　分析対象とした慣用的間接依頼表現

以下の１－８までを keywords として2005年２月と８月の２度、BNC で検索して各表現100例（計800例）を得た。しかしこの中には重複したものもあったのでそれを省き、なおかつ内容的に依頼表現でないものも省いて、今回分析の対象とする例文を合計405例得た。

分析対象の依頼表現		分析対象数
1. would you please	(question + subjunctive + *please*)	78
2. could you please	(question + subjunctive + *please*)	75
3. can you please	(question + *please*)	56
4. would you	(question + subjunctive)	13

5. could you	(question + subjunctive)	40
6. will you please	(question + *please*)	76
7. do you mind -ing	(question)	17
8. would you mind -ing	(question + subjunctive)	50
計		405

3．2　分析対象の依頼表現の文末の形態

次に、各表現がどのような文末の形態を取っているかを見た。本来疑問文であるから疑問符で終わるのが当然であるが必ずしもそうではない。表1にその結果を示す。[3)]

表1　文末の形態

	Total number	with a question mark	with a period	with a comma	No mark at the end	Inserted in a clause
could you	40	22	13	3	1	1
would you	13	7	3	0	3	0
could you please	75	36	36	1	2	0
would you please	78	21	46	3	4	4
can you please	56	29	23	1	2	1
will you please	76	52	18	2	3	1
would you mind -ing	50	42	7	0	1	0
do you mind -ing	17	12	3	0	2	0
Total	405	221	149	10	18	7
%	100	54.57	36.79	2.47	4.44	1.73

この結果以下のことがわかった。すなわちこれらはすべて疑問文であるにもかかわらず疑問符で終わっているのは54.57％と約半数で、そのかわりに終止符で終わっているものが36.79％もある。その他コンマで終わったり何の句読点もなかったり疑問文のまま挿入句として文中に取り込まれているものすらある。つまりこれらの慣用的依頼文は本来の疑問文としての機能を失いつつあるのではあるまいか、その結果ネガティブ・ポライトネスとしての機能が低下しているのではあるまいか、という疑問が生じた。

そこで次に表現別にそれぞれがどの程度まで疑問文として扱われているかを見てみた。表2にその結果を示す。

表2　文末の形態：疑問符の有無

	a question mark	a period	others
would you please	26.9%	59.0%	14.1%
could you please	48.0	48.0	4.0
can you please	51.8	41.1	7.1
would you	53.8	23.1	23.1
could you	55.0	32.5	12.5
will you please	68.4	23.7	7.9
do you mind -ing	70.6	17.6	11.8
would you mind -ing	84.0	14.0	2.0

表2から次のことがいえよう。これらの表現のうち疑問符で終わる率がもっとも低いのは would you please で26.9％しかなく、逆に59.0％が終止符で終わっている。このことは would you please にはもはや本来の「相手の意向をたずねる」という質問的機能はかなりの程度失われ、表面的に「丁寧な言い方をしている」ことを示す単なる標識になっているのではあるまいか。これより少し程度が下がるが could you please にも類似の傾向がある。終止符で終わる率が最も低い（14.0％）のは would you mind -ing で、同時にこれは疑問符で終わる率が最も高い（84.0％）。したがってこの表現には話者の「相手の意向をたずねる」質問的機能が一番よく保持されているのかもしれない。

しかし本論文の目的はこれらの表現の疑問詞の使用や質問機能の如何を見ることではなく、ブラウンとレビンソンがネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの第1にあげているこれらの表現が、真にネガティブ・ポライトネスとして機能しているか否かを見ることにある。次章では英語母語話者がこれらの表現をどのように捉えているかを探ることとする。

4．英語母語話者による判定とコメント

4．1　慣用的間接依頼文の 'Imposition'（強要）の度合いの5段階評価

上の3で見た依頼表現が、疑問文であるにもかかわらず疑問文として扱われない場合が多くあることを知り、現実の英語母語話者はこれらの慣用的間接依頼文をどのように認識しているかを見るために、以下の方法でアンケートを実施した。

相手へのプレッシャーが大きいのではないかと思われる文を BNC の上記405例から15例抽出して、筆者が属する言語学系のネットグループに2005年8月にウェブ上でアンケートの依頼をしたところ16名から回答を得た。アンケートではこれらの文を人から言われたとき、どの程

度強要されていると感じるかを、Very imposing - 5, Fairly imposing - 4, Neutral - 3, Not very imposing - 2, Not imposing at all - 1 という 5 から 1 の数値で記入してもらった。

各文の強要度の数値のほかに、回答者のほぼ全員がそれらの数値は以下の要因によって変化すると書き添えていた。

(a) 会話者間の関係・職業・会話の場面・目的など、状況やコンテクストによる。

(b) 発話される際のイントネーション・声の調子・速さなど、言語外の要素による。

(c) 会話者の出身地・英語方言など、母語とする英語の変種によって異なる。

すなわち、英語による依頼の強要の度合いは言語形式だけでなく言語外の要素が大きく影響する、そのため文字に書かれた字句だけではどれくらい imposing が polite かは判断するのは難しい、という意見である。このことは当然予想していたが、今回の調査の目的が各表現を構成する〈+/−interrogative; +/−subjunctive; +/−possibility operator; +/−*please*〉の各要素の強要度への影響を見ることにあったので、あえて文字のみによる評価を依頼した。

表 3 はその結果で、アンケートに使用した15文を強要度の平均値の高い順に示す。文末の句読点は BNC における表記どおりにした。冒頭には各文を回答者に提示した際の番号を記す。

表 3　分析対象とした依頼表現、および英語母語話者が判断した各文の強要度の平均

番号	分析対象とした依頼表現	平均強要度
2.	Could you not sit in that chair?	4.31
15.	Would you mind telling me where you have been, and where you are going?	4.19
9.	Answer that, will you please?	4.00
3.	Could you take the book in your hand and repeat after me.	3.94
10.	Will you please explain where she has gone?	3.91
12.	Do you mind not using this obscure words [sic].	3.91
4.	Would you kindly explain to me what you're talking about?	3.81
11.	Do you mind explaining how and why you are here?	3.75
6.	Those who vote against would you please stand.	3.70
5.	Here, Nicholas, take that through, would you?	3.13
14.	Would you mind following me.	3.12
7.	Can you please say this on the mike.	2.81
1.	Could you please suggest a possible cause and remedy for the above.	2.73
13.	Doctor, as you're finished would you mind seeing the next ?	2.56
8.	Can you please let me know what problems this might present?	2.44

表3をみると、相手への強要の度合いが高いと判断された文は、could you, would you など<+ interrogative, +subjunctive> というきわめて polite な表現形態を取っていることがわかる。つまり表現上の丁寧さにもかかわらず、imposition の度合いが大きいと判定されたのはなぜか。それはネガティブ・ポライトネスの意図に反するのではないか。アンケートの回答者はこれらの表現をどのように感じるのか。彼らが付記したコメントにその理由を見てみよう。

4．2　分析対象の依頼表現とその強要度へのコメント

回答者の多くはアンケートに答えながら数値の記入だけでは物足りなく感じたのであろう。各文に対して追加のコメントを付記している。以下に平均強要度の高い文の順にそれらのコメントを記す。各文頭およびコメント内で言及されている数はアンケート時の各文の番号を指す。各文の末尾には表3の平均強要度を記す。

15. Would you mind telling me where you have been, and where you are going?　4.19

「このような言い方は警察の取調べのような感じがする」

「このような coordinated の文型（where you have been, and where you are going）は答えを強要する効果がある。テレビ番組のインタビューなども想起されるが、やはりちょっと不自然。むしろ 'could you tell us about where ...' と言いたい」

9. Answer that, will you please?　4.00

「この言い方がどの程度の imposition かは、話し手と聞き手の関係による。雇用主なのか親なのか、それとも同じランクの相手なのか・・・」

「'Imperative + tag + please' には特別の用法がある。この場合は impolite である」

10. Will you please explain where she has gone?　3.91

「警察の取調べのような感じがする」

12. Do you mind not using this obscure words [sic].　3.91

「個人の行動についてあれこれ言うのは（11と同様に）、相手への手助けというよりフェイスの侵害という imposition である」

4. Would you kindly explain to me what you're talking about?　3.81

「この言い方は押し付けがましい感じがする。特に 'kindly' はあまりにも丁寧すぎで皮肉に聞こえる」

「この言い方は押し付けがましい感じがする。特に 'kindly' があまりにも丁寧なので、聞いた方は文全体を皮肉だと判断してしまう」

「このような言い方は判断に苦しむ。まじめに言っているとは到底思えない。なぜなら 'what are you talking about?' 自体が imposing で、私ならごく親しい旧知の間柄でしか使

わない。また 'would you kindly explain to me' という言い方はあまりにも formal で親しい間柄には使わない。そのためこの文全体としてはジョークとしてしか理解できない」

「これは特に皮肉を言うときの言い方だと（私には）思える」

11. Do you mind explaining how and why you are here?　3.75

「警察の取調べのように聞こえる」

「他人の行動をコントロールするのは援助ではなくむしろフェイス侵害行為である」

6. Those who vote against would you please stand.　3.70

「特定の状況において権威を与えられている話し手は（少なくとも英国文化においては）その権威を言語で表現しなければならない。しかし多くの場合使用する表現は大げさなほど polite でなければならない。なぜなら発せられる命令はいずれ実施されることが明らかなのだから」

「これは 'Would those who vote against please stand?' のような言い方をするのが普通だと思う」

「これをどの程度プレッシャーと感じるかどうかは周囲の状況による。誰もが立っているなら同様の行動をしなくてはというプレッシャーは強いだろうし、逆にこの発言をしている人物に対して反対するムードがあるならばそれに従う義務を感じる程度は低いだろう」

14. Would you mind following me.　3.12

「コンテクストによる。もし秘書が重要な来客を案内する場合のセリフならば imposition のレベルは 2 であるが、就職の面接で面接担当者から言われたならばレベル 4 であろう」

7. Can you please say this on the mike.　2.81

「これは 'this' が何であるかによる。重要な秘密事項かそれとも単なる音声のテストか？」

13. Doctor, as you're finished would you mind seeing the next ?　2.56

「医者の通常の仕事の一環であるとすれば、imposition のレベルは低い」

「15と同様、coordinated な命令 (as you're finished would you mind ...) は imposition の効果がある」

8. Can you please let me know what problems this might present?　2.44

「これは手紙かメモか、おそらく上司から部下へのそういうものに書かれる可能性が高い」

4．3　強い依頼・命令を示す要素

上のコメントから、これらの文は <+subjunctive, + interrogative> という polite な依頼表現であるにもかかわらず、有無を言わさぬ命令として受け取られがちであることがわかった。なかでも強要度が高いとされた文に含まれる下の枠で囲んだ要素は、相手の動作や回答の範囲を制限する効果があり、相手の行為の自由を阻害するという点で FTA を大きくし、いっそう

imposition の度合いを強く感じさせたのではなかろうか。

(a) 通常は動詞と一体化して短縮形となる否定辞を動詞から分離して際立たせ、その後に来る事項の禁止を明瞭に伝える。

2. Could you [not] sit in that chair? 4.31

12. Do you mind [not] using this obscure words [sic]. 3.91

(b) 疑問詞を使って質問点を際立たせる。疑問詞を 2 つ重ねると効果はさらに大きい。

15. Would you mind telling me [where you have been], and [where you are going]? 4.19

10. Will you please explain [where she has gone]? 3.91

4. Would you kindly explain to me [what you're talking about]? 3.81

11. Do you mind [how and why you are here]? 3.75

(c) 命令形に 'will you'という tag と 'please' を重ねることによって返事を強要する。

9. Answer that, [will you please]? 4.00

このような質問文は見かけ上は慣用的間接依頼表現でも、命じられた行為を拒否できなくする (a)、回答の範囲を焦点化する (b)、返事を強要する (c) など、直接的な命令であることがあまりにも明瞭なので、もはやネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとは言えず、'without redressive action, baldly'（緩和処置無しの直接的表現）(Brown and Levinson 1987: 69) として受け取られるのではないか。しかしなぜかブラウンとレビンソンは慣用的間接表現のこのような逆効果についてはひとことも触れていない。これは今回、コーパスで検索した例文を英語母語話者に判断してもらった結果、はじめてわかった事実である。

4．4　英語母語話者の反応の意味

上の例文が英語母語話者にはかなり高圧的な命令として受け取られるということは、次の点で外国人である日本人には理解しがたい。まず、<+interrogative, +subjunctive> を含む polite な表現をしている話者をある種の権限を持った人間と判断するのはなぜか。なぜ権威者がそのような丁寧な依頼のしかたをすると判断するのか。第二にそのような典型的依頼表現を polite な表現とは受け取らず、「警察の取調べのようだ」「押し付けがましい」「フェイス侵害である」「上司から部下に言っているみたいだ」など、威圧的な imposition と受け取るのはなぜか。

これを理解するためにはもう一度ポライトネス理論からこの現象を見る必要がある。個人は「行動の自由を持ちそれを阻害されない」ことを前提とする英語圏社会では、相手に何らかの行為を要求する「依頼」は FTA の R*x* 値を高くし FTA 全体の W*x* を大きくするとされる。そ

の結果、社会の良識ある一員を自認する話者は FTA を緩和する態度を示すために、慣用的に容認されたネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの第1「慣用的に間接的であれ」を採用することになる。つまりこのストラテジーを選ぶのは、話者が「社会の良識ある一員」であることを証明するためであって、相手のフェイスに配慮した結果ではないのではないか。

同時にこれらの表現はあまりにも頻繁に定型表現として使用されるため、本来持っていた相手への配慮というネガティブ・ポライトネス本来の機能が薄れてしまって、いまや単なる「丁寧な言い方をしている」という標識にすぎなくなっているのではあるまいか。

このことは上記3．2の表2で、would you please, could you please など、多くの依頼を表す疑問文が疑問符を伴わないままで BNC のデータに現れていることにも通じる現象である。その意味で<+ interrogative, +subjunctive> という慣用的間接依頼文はもはや相手に対する話者の丁寧な態度を示すのではなく、英語圏社会の社会的期待すなわちネガティブ・ポライトネスを遵守しているという話者の態度を誇示するにすぎなくなっているのではなかろうか。そのため優位の者は当然許されるはずの威信的態度を取らないで、このようないわゆる丁寧な表現を用いて余裕のある態度を示そうとする。しかしこれらの表現はすでに慣用化が進んで相手への配慮を示すどころか優位者の驕りを感じさせるだけになってしまったので、アンケートのコメントにあったように、「警察の取調べのようだ」「押し付けがましい」「フェイス侵害である」「上司から部下に言っているみたいだ」と受け取られるのだろう。もし親しい間柄で 'would you kindly' などと言われると「あまりにも丁寧で冗談か皮肉かと思う」というコメントがあったのはこのことの傍証となろう。類似の振る舞いは日本社会にも慇懃無礼として存在するが、そこにはあきらかに優位者から劣位者への蔑視が透けて見える。

5．BNC 'would you please' と 'could you please' の各50文への英語母語話者2名の意見

2005年2月時点での BNC のコーパスから 'would you please' と 'could you please' の文例各50を、アメリカ人女性とオーストラリア人女性の2名（いずれも大学で英語・言語学を指導）に示して、各文がどの程度に polite だと思うかを記してもらった。不明（unclear）という記入も多かったがそれはコンテクスト・音声がわからないと判断できないという理由であった。

5．1　Frustration/irritation/admonishment(＝very/fairly imposing) と判断された文

フラストレーション（frustration）・苛立ち（irritation）・警告（admonishment）など、強制力（very/fairly imposing）を感じる、というコメントが付いたのは以下の文である。

（1）疑問詞を使って説明を要求するのは大きな強制力を感じさせる。これは上の３．４のアンケートの分析でも同様の判断が示された。

・I know it's not my concern Silas--; but [would you please] explain [why] this room has to be measured?

・ [Would you please] explain [why] you insisted on bringing me here instead of taking me to the Trevi?

・ [Would you please] write tell her [what the hell] was going on?

・ [Could you please] describe [what] 's involved in the change over.

（2）文の内容が相手の行動を指示する場合、would you please があっても相手への強い命令と受け取られる。

・Isobel, [would you please] stop being a deacon and be a human being for a moment?

・ [Would you please] write tell her what the hell was going on?

・ [Would you please] fetch me a towel and my cloak before I turn into an iceberg?

・ [Would you please] pick up your socks.

・ [Would you please] get this vehicle out of here as quickly as possible, sir.

・'[Would you please] get on with your work, Sandra,' said Edward with unusual severity.

５．２　Typical, formal, polite (written) と判断された文

書き言葉として典型的（typical）・形式的（formal）・丁寧（polite）とされたのは以下の文である。

（1）このような疑問文は書類上での依頼の典型的な形式なのであろう。この場合、疑問文でも終止符で終わることが多い。

・ [Would you please] be good enough to arrange signature on behalf of Three Vee Ltd?

・If you would like a copy of the Constitution [would you please] write to the office and enclose a S.A.E.

・ [Would you please] fill in the slip below indicating to which course you wish to be attached and return it to the office as soon as possible.

・If it is, [could you please] acknowledge this by signing and returning the attached copy of this letter.

・ [Could you please] advise me on a point regarding my Range Rover Turbo D, new in August of last year.

・ [Could you please] suggest a possible cause and remedy for the above.

（2）以下のような文は、話者が上位者で下位者へ行動の要求に could you please が使われていると理解されている。そのため rude とは思われない。換言すれば上から下への命令であっても、慣用的間接依頼文の形式をとるのが polite とされる、ということである。

・Now [could you please] answer my question?
・ [Could you please] answer this for me?
・ [Could you please] help me by telling me something about it?
・ [Could you please] at least tell them it's quite urgent?

5．3　Polite command? と判断された文

以下の文は「丁寧な命令か」(polite command?) と記されたもので、対話者間の関係・状況および発話の際の音声など文字以外の情報による、ということであろう。しかしこれらの文がすべて終止符で終わっているのは下降調のイントネーションで発話されたことを示すので、文体は polite であっても相手の答を期待しない command（命令）と判断されたと思われる。

・Those who vote against [would you please] stand.
・If you feel it is inappropriate for your client [would you please] advise me.
・ [Would you please] read through the report and let me have your written comments.
・However, should any local authority disagree with this position, [would you please] advise me immediately.

5．4　英語母語話者のコメントのまとめ

Irritating/frustrating とされた表現には、疑問詞を使うものと would you please を使うものとがある。疑問詞を含む依頼表現が impolite であることは上の 4．3 で指摘した通りである。また would you please の後に相手に特定の行為を示唆する動詞が続くと、かなり強烈な命令と感じられるらしい。この場合おそらく疑問符の有無に関係なく下降調のイントネーションで発話されると判断されたのであろう。また単純な動作に could you please を使うと、へりくだった依頼ではなく上位者から下位者への丁寧な命令となるらしい。

書き言葉では would you please, could you please は依頼の常套句として使われるようで、受け取る方も対面時に言われるほどの威圧感は受けず、一応丁寧な表現と認識されるようだ。ただ、会話においては同じ文言でもイントネーションやスピード、声の調子などに加えて、発話時の表情によって「威圧的」と取るか「丁寧」と取るかは分かれよう。この点、発話以前にすでに対話者間のヒエラルキーを担っている日本語の敬語とは基本的に異なる。

6．シャーロック・ホームズの小説の会話から

シャーロック・ホームズを主人公とする小説の一部がコーパス・コンコーダンスとしてウェブ上で公開されている。それを利用して彼の小説の中で conventionally indirect request がどのように使用されているかを拾ってみた。使用したデータは Sherlock Holmes Concordances (http://www.edict.com.hk/concordance/corpus.htm) で、総数216,386 words が蒐集されている。

この collection に収納されている short stories は以下の通り。*The Red Headed League, The Hound of the Baskervilles, A Scandal in Bohemia, A Case of Identity, The Five Orange Pips, The Man with the Twisted Lip, The Adventure of the Speckled Band, The Adventure of the Engineer's Thumb, The Adventure of the Noble Bachelor, The Adventure of the Beryl Coronet, The Adventure of the Copper Beeches, The Blue Carbuncle, The Sign of Four.*

6．1　検索対象表現

上記の小説全部の中から modals を選んで検索した結果、would = 675; could = 645; will = 565; can = 405; may = 376; mind = 136 を得た。さらにこの中から依頼表現と解釈できるもののみを抽出した。この他に please を含む表現も検索した。

6．2　検索結果

検索項目としては 'would you', 'could you', 'will you', 'can you' を使用したが、検索結果の中に 'would you please', 'would you mind', 'would you kindly', 'would you have the kindness' なども含まれたので、ブラウンとレビンソンが conventional indirectness として示した <+/−question; +/−subjunctive; +/−possibility operator; +/−*please*> のパターンは大体入ったとしてよかろう。

コンコーダンスでは検索語を含む数行が提示されるだけなので、会話者間の関係が分かる場合と分からない場合がある。ここではまず数的にもっとも多かったホームズからワトソンへの発話を取り上げ、次にその他の会話者間で関係が明らかなものを取り上げる。それらの関係については各発話後の括弧内に記入する。関係が不明なものについては発話のみを提示する。

6．2．1　ホームズからワトソンへの発話

衆知のごとく、ホームズとワトソンは長年の付き合いの親友で気兼ねするような間柄ではない。それにもかかわらず次の例に見られるように、いわゆる polite request をしている。しかもワトソンに対して 'Doctor' とか 'Dr. Watson' とか、敬称を付けて呼んでいるのは日本的発想では考えられない。他の場面では直接的な命令形もあるし、単に 'Watson' と呼ぶ場面もあ

るが、少なくともジョークや皮肉ではなくて親友にこのような言い方をしているのは注目に値する。

“ Would you have the kindness to let me have an opinion upon the character or habits of the late owner?”
“ Would you mind reading me the advertised description of Mr. Hosmer Angel?”
“ Could you scale that wall, Doctor ?”
“ Will you come upstairs, Dr. Watson ?”
“ Can you tell the position of the rooms?”
“Come out,” said he, “and please be careful with the revolver.”
“ Might I trouble you for it — the inside page, please , with the leading articles?”

6．2．2　その他の関係

以下にあげている最初の例はホームズが依頼人に言っているセリフなのでこの程度の丁寧さは当然であろう。次の 2 例は *A Scandal in Bohemia* の終わりに近い場面で、登場人物は罪を犯したボヘミアの国王と、彼を警察に連行する警官との対話である。はじめに国王が警官の言葉遣いが無礼である、として「私のような royal blood の人間にはちゃんと ‘sir’ と ‘please’ をつけて言え」と要求している。下位の相手と見なしている警官に対しても ‘Have the goodness’ という丁寧な言い回しをしているが、DVD で見るといかにも王族らしく威張った態度である。この要求に対して警官はしかたなく ‘Well, would you please, sir, ...’ と言いなおしている。

“ Would you have the kindness to go into your room and bar your shutters?” (from Holmes to Miss Stoner)
“You may not be aware that I have royal blood in my veins. Have the goodness , also, when you address me always to say ‘sir’ and ‘please’.” (from the king to a policeman)
“Well, would you please , sir, march upstairs, where we can get a cab to carry your Highness to the police-station?” (from the policeman to the king)

6．2．3　対話者間の関係不明

対話者間の関係が不明なので、ここでは表現形態によって分けてみる。

（1） Modal の使用

以下の発話をいちべつすると、少々複雑な内容の時は仮定法が使われ、単純な行動の指示の時は直説法が使われているが、いずれも疑問文で modal を伴っている。

“ Would you mind getting that orchid for me among the mare's-tails yonder?”
“Now, would you kindly step over to that flap-window and smell the edge of the woodwork?”
“Have you your stethoscope? Might I ask you — would you have the kindness ?”
“ Would you give me an introduction to him?”
“When you pass Bradley's, would you ask him to send up a pound of the strongest shag tobacco? Thank you.”
“ Could you ring him up? — thank you!”
“ Will you come with me?”
“ Will you remember to give them that . . . .?”
“ Can you let me have 200 pounds?”
“ Can you tell me where it went to?”
“ Can you suggest no explanation?”
“ Can you tell me anything about him?”
“ Can you , then, tell me the names of any . . . . ?”

（2）Please の使用

断言はできないが、内容から察するに ‘if you please’ はホームズのセリフではないかと思われる。これと同時に発せられている呼称が ‘Miss Stoper’ とか ‘Mr. Holder’ とか、ホームズの依頼人らしいことを考え合わせれば、捜査の主導権を握っている彼がある種の権威をもって発していることは確かである。

また ‘please’ は、‘please, please’ と重ねて発話することによって強い依頼を表すといえそうだ。イントネーションによっては、形式的に modal を使うよりも、差し迫った要求を伝えることができるのではないか。その点、文末に付加された ‘please’ は形式的で、話者の気持ちのあまりこもらない義務的な polite request のように思われる。

“Very good. Come this way, if you please .”
“And now let us talk about George Meredith, if you please , and we shall leave all minor matters until tomorrow.”
“Do you desire your name to be kept upon the books?” she asked. “ If you please , Miss Stoper.”
“It is our task to find that out, so now, if you please , Mr. Holder, we will set off for Streatham together, . . . ”
‘ Please, please , as you are a gentleman, burn this letter, and be at the gate by ten o'clock.’

“ Please, please , be frank with me, Miss Stapleton, for ever since I have been here I have been conscious of shadows all round me. . . . ”

“If absent, please return wire to Sir Henry Baskerville, Northumberland Hotel.”

“ Please forget the words I said, which have no application whatever to you.”

“The envelope, too, please .”

“This way, please .”

6．3　ホームズの小説の会話に見られる特徴

コーパスで集めたデータが表現そのものに集中しているのに比べて、小説で使われた表現は会話者間の関係やその場の状況を反映しているのでより現実の言語使用に近い。ただ、コナン・ドイル（1859-1930）がこれらの小説を書いたのが百年も前なので、そこで使われている英語が現在のわれわれにどれほど参考になるかという問題はある。しかし話者の意図・感情が使用言語に表れるという事実は変わらない。そのような視点から見て概略次のことがいえよう。

（1）ホームズとワトソンのような親密な間柄でも、‘would you’ をはじめ、すべての丁寧な依頼表現が使われている。このような使用は現代の英米の家庭でも見られることで、親しい間柄でも FTA の内容次第ではネガティブ・ポライトネスがふんだんに使われる。

（2）軽い依頼の場合は、subjunctive mood よりも indicative mood の方が好まれるらしい。

（3）英語圏社会では丁寧な依頼として常に子供に使用させると言われる ‘please’ は、確かに便利な語のようで、おそらくイントネーションによって「心からの依頼」「表面的な依頼」などを区別することができるのであろう。

（4）収容語数216,386のうち、慣用的間接依頼表現の代表的なもの ‘would you please’, ‘would you kindly’, ‘would you mind’, ‘would you have the kindness’ 全部を合わせても 7 例しかなく、その他 ‘would you’, ‘could you’ が 4 例、‘will you’, ‘can you ‘が10例、‘please’ が13例（うち 1 例は ‘please’ の使用を要求するもの）であった。このことは何を示しているのであろうか。このように多くの小説の中で、依頼をする状況がこんなに少ないとは考えられない。ということは、多くの依頼がこれらの modal や please を使わずに直接的な命令文でなされているか、あるいは別の文型でされているのではなかろうか。これは今後の研究課題である。

（5）ホームズの小説で集めた依頼表現には、皮肉・脅し・慇懃無礼と思われるものはなくて、ほとんどが真に丁寧な依頼であった。そしてコーパスのデータで強要度が高いとされた <+ subjunctive + interrogative + *please*> のパターンは少なかった。推測に過ぎないがもしかすると「心からの依頼」を表す場合にはいわゆる慣用的間接依頼表現はあまり使われないのか？それとも、かつては「真の丁寧さ」を表していたこれらの表現が、百年間使用されるうちに磨り

減ってその「真の意味」を失ったのだろうか。これも今後の研究課題である。

7．結論

ネガティブ・ポライトネスは理性ある社会人の 'territory and self-determination'（領土と自己決定）という欲求を尊重することにある（Brown and Levinson, 1987: 70）。そのため相手に対して少しでもこれに抵触する行動、すなわち「領土の侵略・行動の制御」を行う可能性がある場合には、話者は最大の注意を払ってそれを緩和する努力をしなければならない。これを言語で達成しようとするのがネガティブ・ポライトネスであり英語圏社会のマナーも大枠これに添っている。なかでも相手の行動を制限する典型的な行為「依頼」を行う場合には丁重な言い回しが期待され、いくつかの文が慣用的にその役目を果すとされている。本論文ではそのような慣用的間接依頼文がどれほど相手の行動の制御を緩和する機能を果しているかを、コーパス・データで蒐集した依頼文に対する英語母語話者のコメントを中心に検証した。

書き言葉と認定された依頼文で使われている 'would you', 'could you' などを含む慣用的間接依頼表現は、期待通りの緩和機能を果していることがわかった。また百年前の小説ではあるが、ホームズが事件の依頼人に何かの依頼をする際には 'would you' などの表現が使われ、親しい友人のワトソンに対しても何か依頼する時にも同様の表現が使われていた。おそらくこれが英語母語話者のネガティブ・ポライトネスに基づく基本的な言語使用なのであろう。

しかし話し言葉と判定された 'would you', 'could you' などを含む依頼文の多くは、意外にも強制力を感じさせる命令文と感じられるらしいことがわかった。このような英語母語話者の反応を見ると、本来 FTA を緩和するはずのこれらの慣用的間接依頼表現が、どこまでネガティブ・ポライトネスとして機能しているか疑わしい。

今回は文字で書かれた文を使用したために限定つきの結果となったが、実際のコンテクストで発話されたものを対象にすればちがった反応が出ることは大いにありうる。また、取り上げた依頼文には特に imposition を強めると思われるいくつかの要素があったために、これらが依頼文の定型 <+interrogative, +subjunctive> の FTA 緩和力を乗り越えて、強要度を上げたとも考えられる。とはいえ、このようなポライトネスの点では相反する言語要素が 1 文中に共存して「強要度の高い依頼表現」となっていることもまた事実である。

最後に日本語との違いを一言述べたい。英語ではいかにこれらの表現が慣用化し定型化しても、その使用を決定するのは話者が相手に行う行為の内容による。相手に対して何らかの FTA を行うときにのみこれが動員されるのであって FTA を行わないときにはまったく関係ない。この点が相手によって使用言語の選択が決まる日本語とは大きく異なる。日本語では敬語を使うか否か、どのレベルの敬語を使うかは、もっぱら相手との上下親疎の関係によって決

まり、行為 R*x* の内容はほとんど問題にされない。相手との関係（PとD）が FTA の大きさ W*x* を決める最大の要因であって、英語ならば当然含まれるべき R*x* はほぼ除外される。日英のポライトネスの出発点にはこのような大きな違いがある。

これらの点について日英のポライトネスを比較して論じたものに堀（1996）と Hori（2004）があり、特にポジティブ・ポライトネスと英語教育の接点を論じたものに堀他（2006）がある。今後はポジティブ／ネガティブ両面から日本語との関連を見てみたいと思っている。

注

1）本論文は、2005年9月第44回大学英語教育学会（JACET）全国大会における口頭発表を論文にしたものである。本誌掲載に関して匿名査読者2名から有益なコメントを頂戴し、それを参考にして一部修正加筆した。ここに記して感謝の意を表明したい。

2）コーパスは特定の用語の使用頻度を見る目的で使用されることが多いが、本論文ではよく使われる表現を集めることが目的なので、50例に限定しても資料としては十分と判断した。なお各例文を談話分析的に扱うのが目的ではないので話者等の詳細な情報は必要ではない。むしろ無作為に集められた典型的例文に母語話者がどのような反応を示すかの方に主眼がある。

3）BNC のデータは約90％がさまざまな種類の書き言葉、約10％がさまざまなジャンルの話し言葉を文字化したもので、前者をデータとして記載する際には書かれたものを忠実に記すとしているが、話し言葉の文字化については特に説明が見られない。おそらく聞き取った際の音調に忠実に記しているのであろう。その意味では疑問符の付加には通常の規準が適用されていると思われる。

参考文献

Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press, 1987.

堀　素子「英語圏社会における Politeness 概念――日本社会との対比――」『東海女子大学紀要』第15号（1996）：37-66.

Motoko Hori, "An Analysis of Language Use in Japan Viewed from Brown and Levinson's Politeness Theory." *Journal of Inquiry and Research* 79 (2004): 149-167.

堀　素子・津田早苗・大塚容子・村田泰美・重光由加・大谷麻美・村田和代『ポライトネスと英語教育：言語使用における対人関係の機能』独立法人日本学術振興会平成17年度科学研究費補助金・研究成果公開促進費（課題番号175152）による出版．東京：ひつじ書房、2006.

（ほり・もとこ　外国語学部教授）